

石狩市厚田多機能拠点形成ビジョン

(原案)

| | | |
|-------|---------------------------|----|
| 第 1 章 | 多機能拠点形成ビジョン策定の目的..... | 1 |
| | 1.1 策定の背景と目的 | 1 |
| | 1.2 多機能拠点形成ビジョン対象地域 | 2 |
| 第 2 章 | 地域資源の整理 | 3 |
| | 2.1 地域の概況..... | 3 |
| | 2.2 地域資源 | 13 |
| 第 3 章 | 地域課題の整理 | 17 |
| 第 4 章 | 石狩市厚田多機能拠点形成ビジョン..... | 19 |
| | 4.1 基本的な考え方（コンセプト） | 19 |
| | 4.2 地域の関わりと必要な拠点機能 | 20 |
| 第 5 章 | 推進方針..... | 31 |
| | 5.1 ビジョンの推進方針..... | 31 |

第1章 多機能拠点形成ビジョン策定の目的

1.1 策定の背景と目的

厚田区は、石狩市の北に位置する日本海側に面した地域で、春から秋まで吹くさわやかな北寄りの風「あい風」の恵みによって、古くはニシンの漁場として栄えた場所で、平成 17（2005）年に石狩市、厚田村、浜益村が合併して現在の形（石狩市厚田区）になりました。

厚田区には、水平線に沈む夕日に代表される美しい眺望や森林・海岸線などの魅力ある自然を活かした「海浜プール」や「キャンプ場」、「夕日の丘観光案内所」などの集客施設があり、新鮮な海産物を直売する「朝市」などとともに、多くの観光客が訪れています。

しかし、厚田区の人口は、昭和 45（1970）年以降減少が続いており、老年人口の増加と年少人口の減少による高齢化が顕著となっています。この結果、地域では、地域産業や商店街などの活力低下や、交通・買い物などの日常生活の利便性の低下などが課題となっています。

厚田区では、平成 17（2005）年の合併以降、地域協議会を中心として、地域課題の解決や地域資源を活用した振興策の実践に取り組み、地域の交通弱者を支援する「ライフサポートの会」、地域の歴史文化を伝承する「厚田資料室サポートの会」、農・漁業・商・観連携による地域活性化を目指す「厚田こだわり隊」など、住民を主体とするさまざまな団体が生まれ、その活動を続けています。

厚田区地域協議会は、これらの活動（ソフト事業）を踏まえて、地域振興の核となる建物（ハード事業）のあり方について、複合施設建設構想策定委員会を立ち上げ、平成 25（2013）年 12 月から、分科会を含め 16 回にわたる検討を行い、平成 27（2015）年 5 月に「厚田複合施設基本構想」を策定しました。また、構想により作成された複合施設は、平成 27（2015）年 1 月に国土交通省の「重点道の駅」に選定されました。

「多機能拠点形成ビジョン」では、こうした背景を踏まえて、厚田の自然・歴史・食などの地域資源を複合的に活用した施設のあり方と、周辺地域とも連携して、交流人口の増加や農漁業を中心とする地域産業の振興を図るとともに、地域の人々が主役となって楽しく暮らすことのできる地域づくりに資する多機能拠点のあり方を示すことを目的としています。

厚田における多機能拠点の形成は、石狩・浜益も含めた地域全体の活性化を目指しています。厚田市街地周辺エリアでの取組を石狩市全体で連携して進め、多機能拠点を核とした取組の範囲を拡大することで、広域的な活性化につなげます。

1.2 多機能拠点形成ビジョン対象地域

多機能拠点形成ビジョンの主な対象地域は、下図に示す厚田市街地周辺エリアとします。

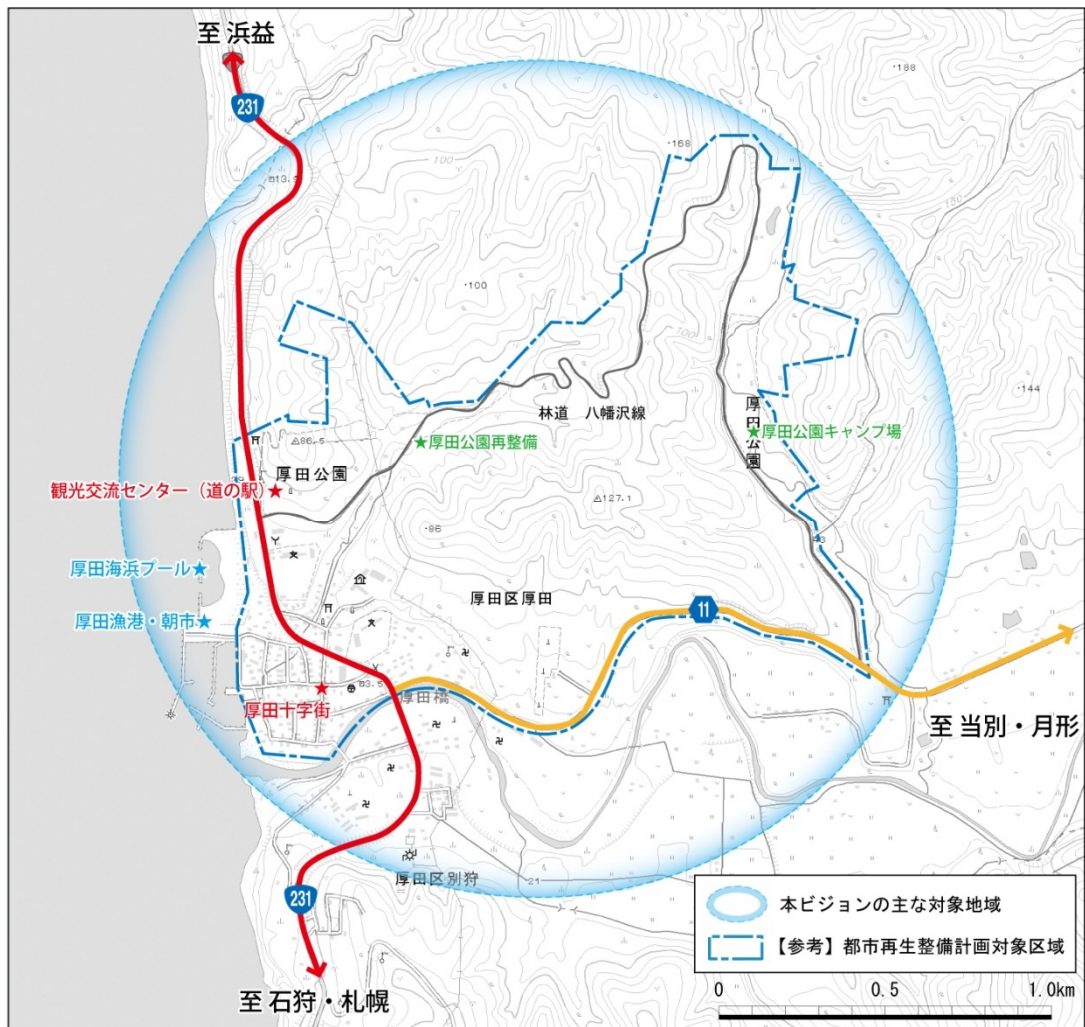


図 1 多機能拠点形成ビジョンの主な対象地域

第2章 地域資源の整理

2.1 地域の概況

(1) 地勢

石狩市は、石狩管内の北部に位置しています。平成 17(2005)年 10 月、厚田村、浜益村との合併により、新たな石狩市が誕生しました。

行政面積は 72,242ha と旧石狩市の約 6 倍の面積となり、南北に長い地形となっています。石狩市から札幌市までは、約 15km(石狩市役所～札幌市役所間の距離)となっており、札幌都市部からの交通アクセスに優れています。

厚田区は、石狩市中心部からさらに約 30km(石狩市役所～厚田支所間の距離)北に位置しています。石狩湾に面する海岸は暑寒別天売焼尻国定公園に指定されるなど豊かな自然を有しています。

気候は比較的温暖な日本海側の気候で、冬は降雪量が多く、石狩市の平成 26(2014)年度アメダスデータでは累計 757cm となっています。石狩市のうち、旧厚田村および旧浜益村は特別豪雪地帯に指定されています。また、春から秋まで吹くさわやかな北寄りの風は「あい風」と呼ばれ、厚田区では古くから幸せを運ぶ海からの風として親しまれてきました。冬季に大陸から吹き出す北西の季節風(束風、玉風)は、日本海沿岸に吹き寄せ、吹雪や大雪をもたらしています。(出典：藤女子大学 QOL 研究所紀要 6(1), 5-16, 2011-03)

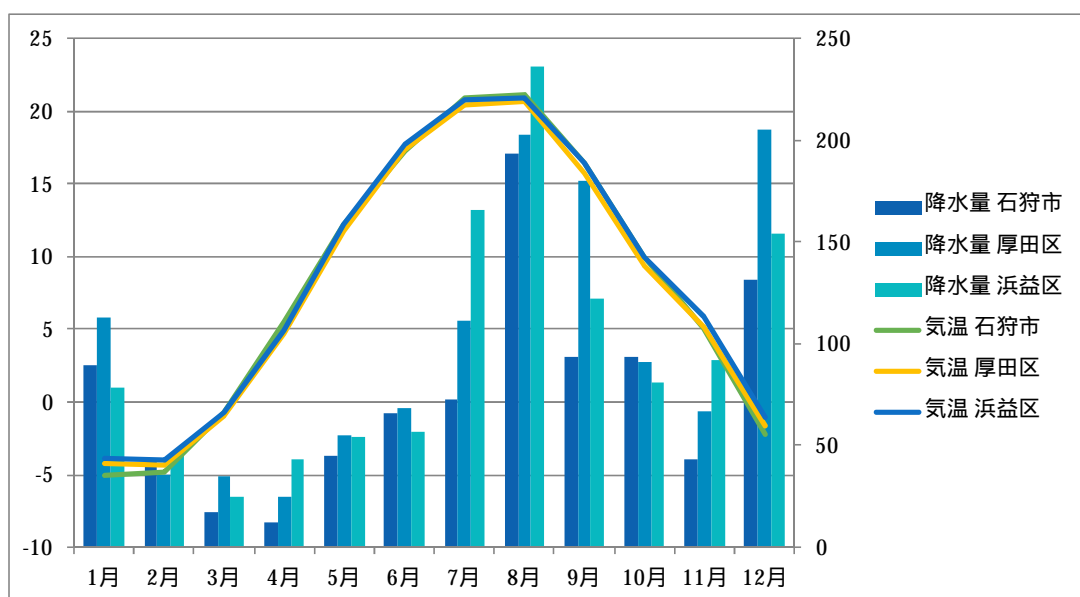


図 2 気象データ

(出典：平成 26(2014)年度アメダスデータ)

(2) 人口

石狩市の人口は 59,124 人となっています（平成 27（2015）年 10 月末現在）。石狩市全体の人口・世帯数の推移をみると、人口に関しては、昭和 45（1970）年以降急速に人口を伸ばし、平成 12（2000）年以降横ばい～減少傾向にあり、世帯数は増加傾向にあります。平成 22（2010）年度の国勢調査データより、年齢別人口をみると、老年人口が 23.1%、生産年齢人口が 63.3%、年少人口が 13.6%で、北海道全体の平均値と同程度となっています。

石狩市の中でも、厚田区や浜益区は老年人口の増加と年少人口の減少の傾向が顕著となっています。石狩市の高齢化率は 23.1%（平成 22（2010）年時点）であるのに対し、厚田区、浜益区の高齢化率は 41.3%（平成 22（2010）年時点）です。

石狩市の産業別人口の推移をみると、平成 12（2000）年以降減少傾向にあり、産業別の割合はほぼ横ばいの傾向となっています。

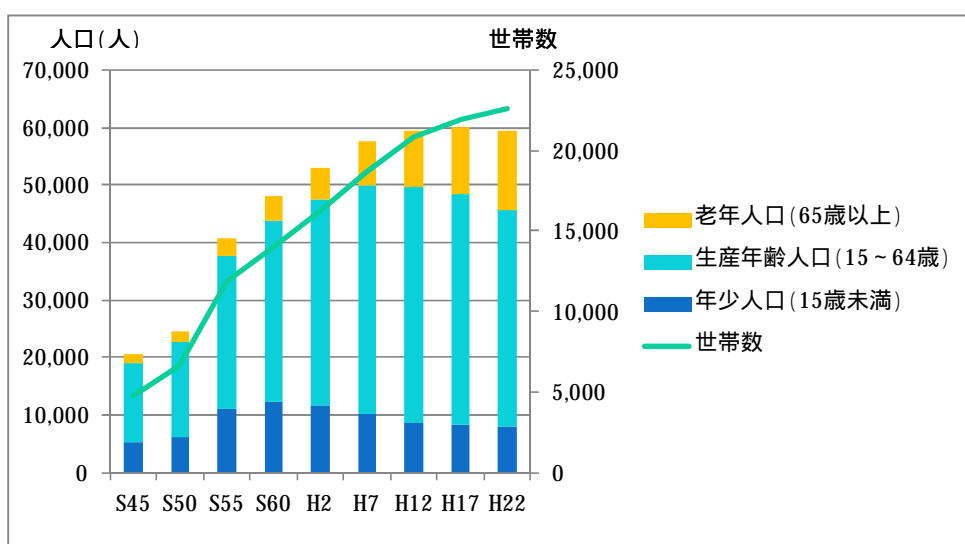


図 3 石狩市の人口・世帯数の推移

(出典) 国勢調査 昭和 45 年～平成 12 年のデータ：厚田・浜益・旧石狩の合計値

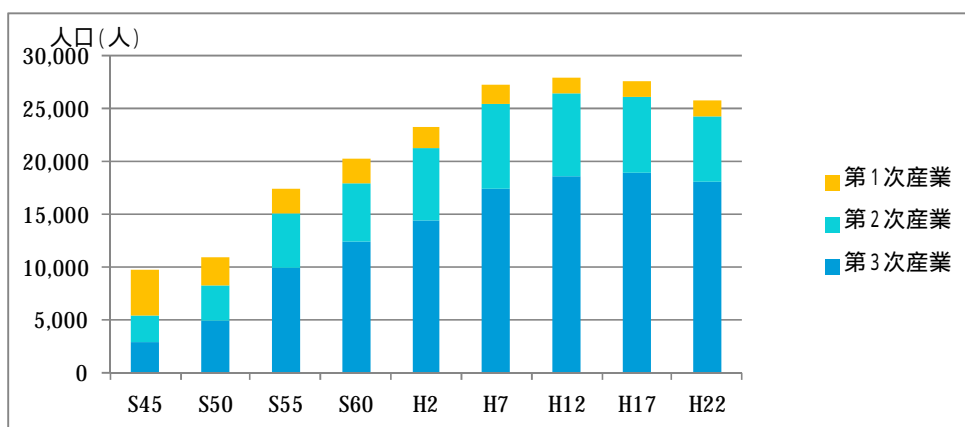


図 4 石狩市の産業別人口の推移 (出典：国勢調査)

(出典) 国勢調査 昭和 45 年～平成 12 年のデータ：厚田・浜益・旧石狩の合計値

厚田区の人口は 2,032 人(石狩市の 3.4%)、浜益区の人口は 1,464 人(石狩市の 2.5%)となっており(平成 27(2015)年 10 月末現在)昭和 45(1970)年以降減少が続いています。

厚田区・浜益区の産業別人口の推移をみると、石狩市の中でも、特に 1 次産業の割合が高い地域となっていますが、昭和 45(1970)年以降、1 次産業の人口減少が著しくなっています。

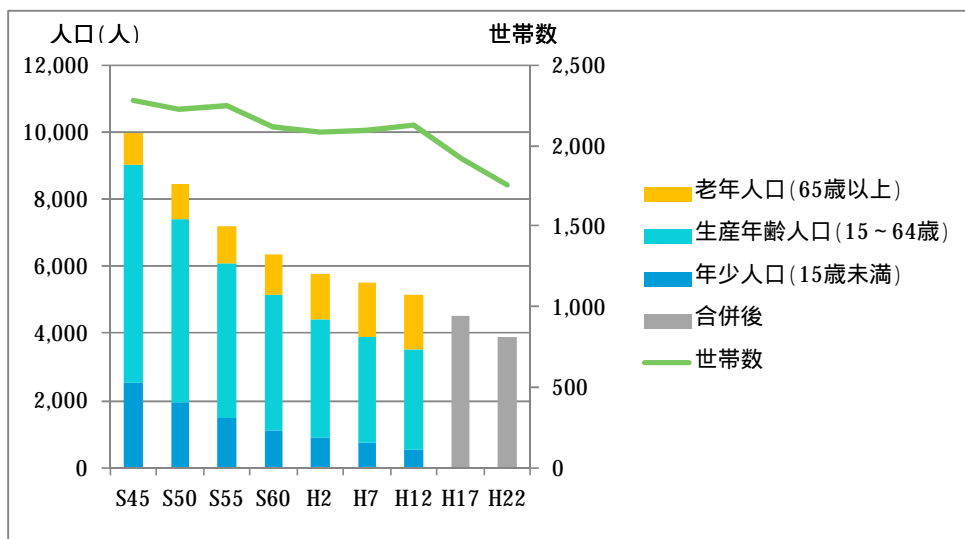


図 5 厚田区・浜益区の人口・世帯数の推移

(出典) 国勢調査

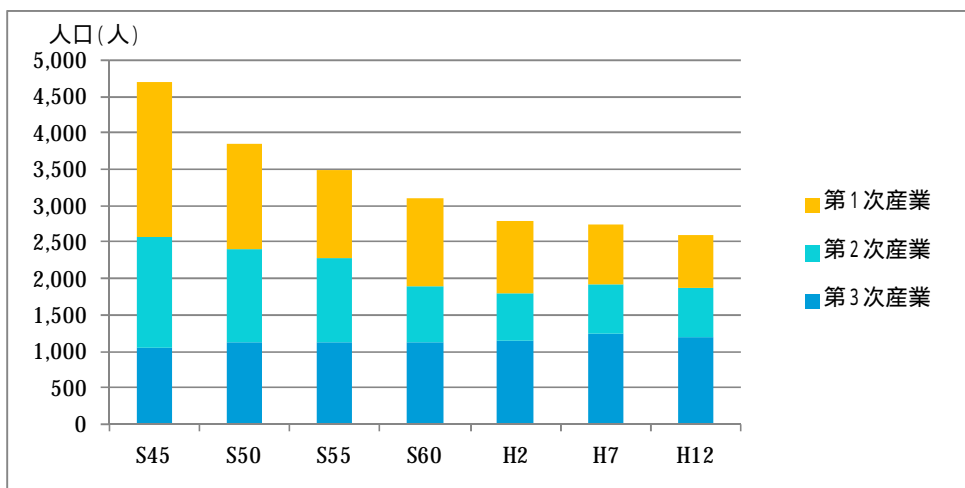


図 6 厚田区・浜益区の産業別人口の推移

(出典) 国勢調査

(3) 交通

道路網・交通量

石狩市は南北に国道 231 号、東西に国道 451 号、道道 11 号(月形厚田線)、道道 527 号(望来当別線)、国道 337 号が走っています。

厚田区の主要な道路は、南北に走る国道 231 号と、東西に走る道道 11 号月形厚田線となっています。国道 231 号は、日本海オロロンラインの一部となっており、人気のドライブルートとなっています。

また、道内の一般国道、道道に比べると、国道 231 号(月形厚田線～451号の区間)及び道道 11 号月形厚田線では、大型車が多い傾向となっています。

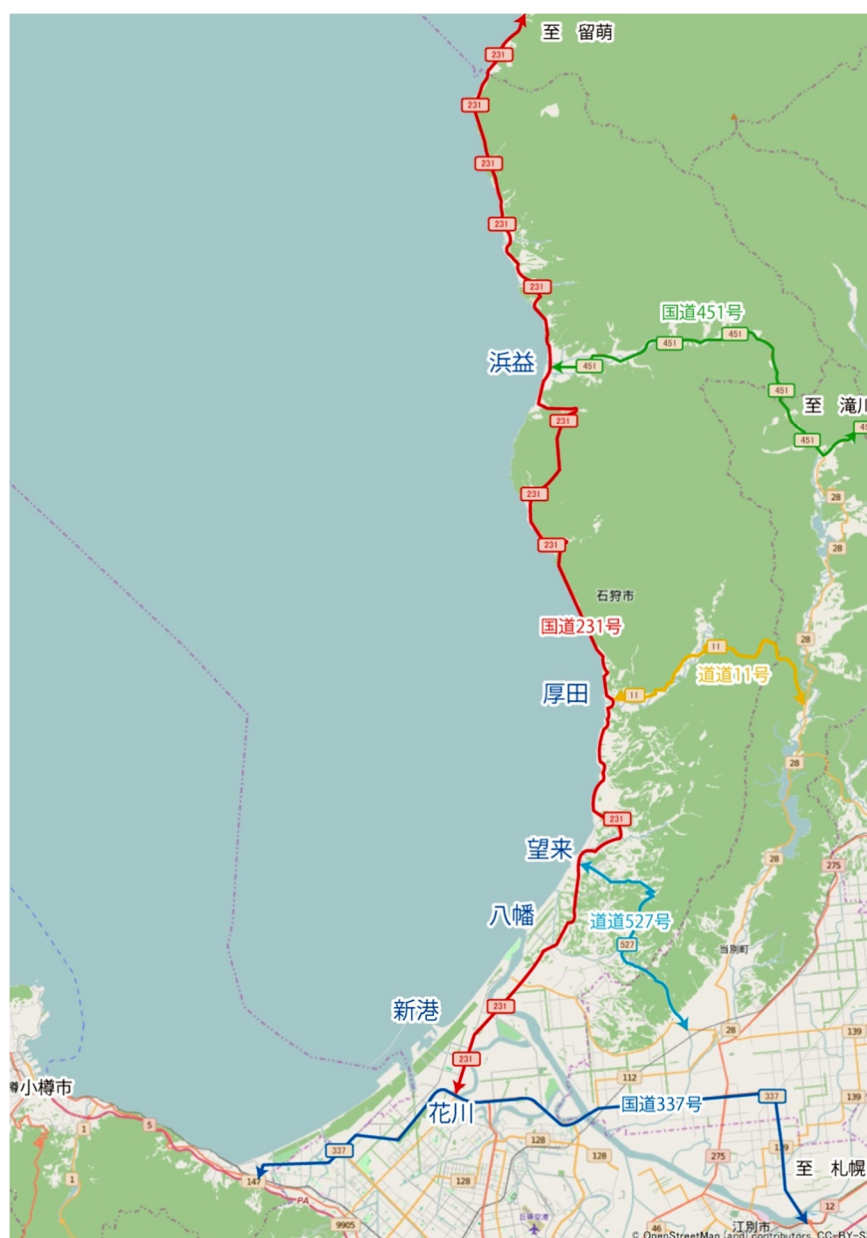


図 7 石狩市周辺の道路網

表 1 厚田市街地周辺エリアの主要道路の交通量

| 路線名 | 起点側 | 終点側 | 昼間 12 時間自動車類 交通量 (上下合計) | | | 昼夜率 | 昼間 12 時間 ピーク 比率 (%) | 昼間 12 時間 大型車 混入率 (%) |
|------------------|---------------|--------------|----------------------------|-----|------|------|---------------------------------|----------------------------------|
| | 路線名等 | 路線名等 | 小型車 | 大型車 | 合計 | | | |
| | | | (台) | (台) | (台) | | | |
| 一般国道 231号 | 望来当別 線 | 月形厚田 線 | 2302 | 308 | 2610 | 1.22 | 9.3 | 11.8 |
| 一般国道 231号 | 月形厚田 線 | 一般国道 451号 | 854 | 306 | 1160 | 1.22 | 11.9 | 26.4 |
| 道道 11 号 月形厚田線 | 当別町・ 石狩市 境 | 一般国道 231号 | 351 | 109 | 460 | 1.26 | 12.9 | 23.8 |

(出典) 平成 22 (2010) 年度交通センサス

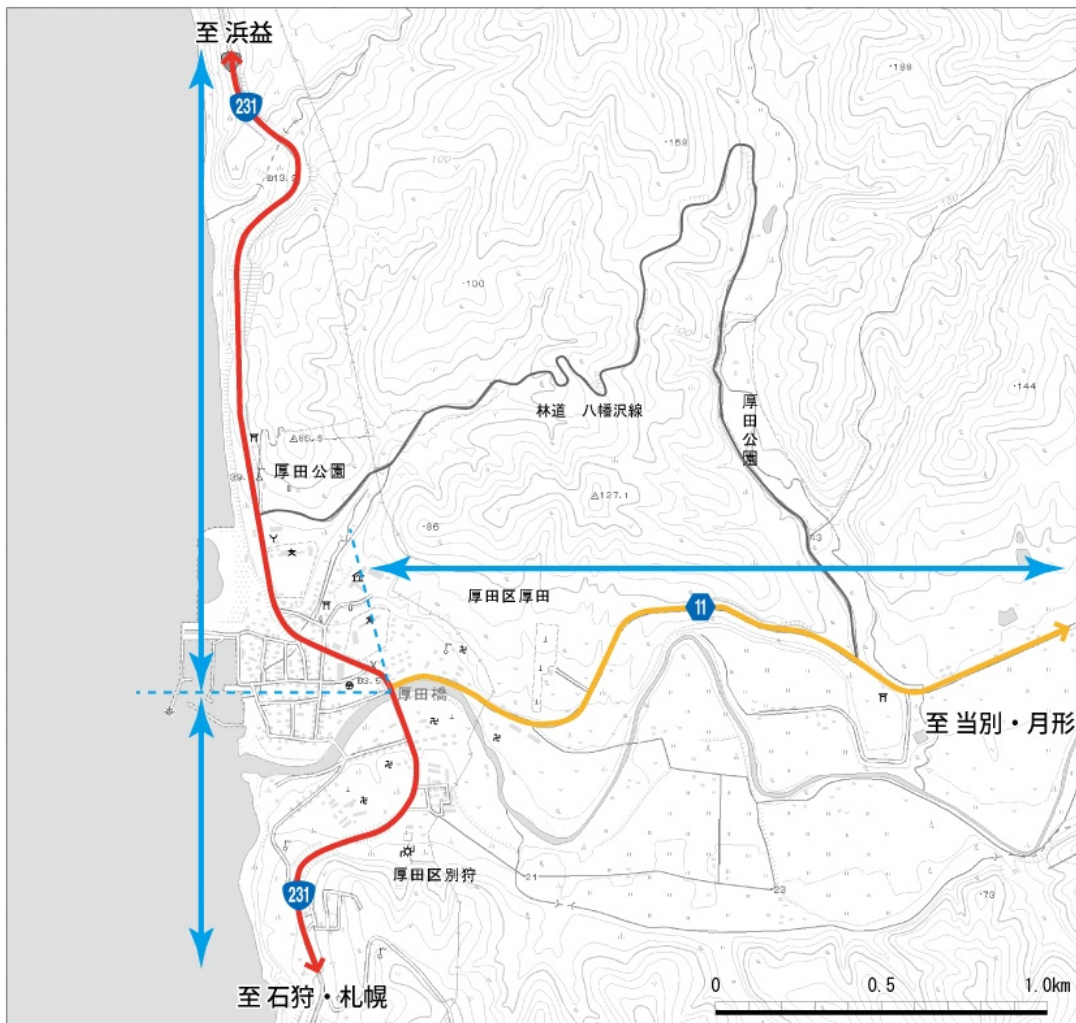


図 8 厚田市街地周辺エリアの主要道路

厚田市街地周辺エリアの国道 231 号の昼間 12 時間平均交通量について、小型交通量に着目してみると、ピークとなるのは 8 月で、平日は 3000 台、休日は 7000 台近くに上っています。一方、12 月～3 月の積雪時期は、小型車交通量は 1000 台～1500 台程度と少なく、夏期と冬期の差が大きいのが特徴です。

また、夏期は休日の交通量が多く、平日との差が大きくなっています。

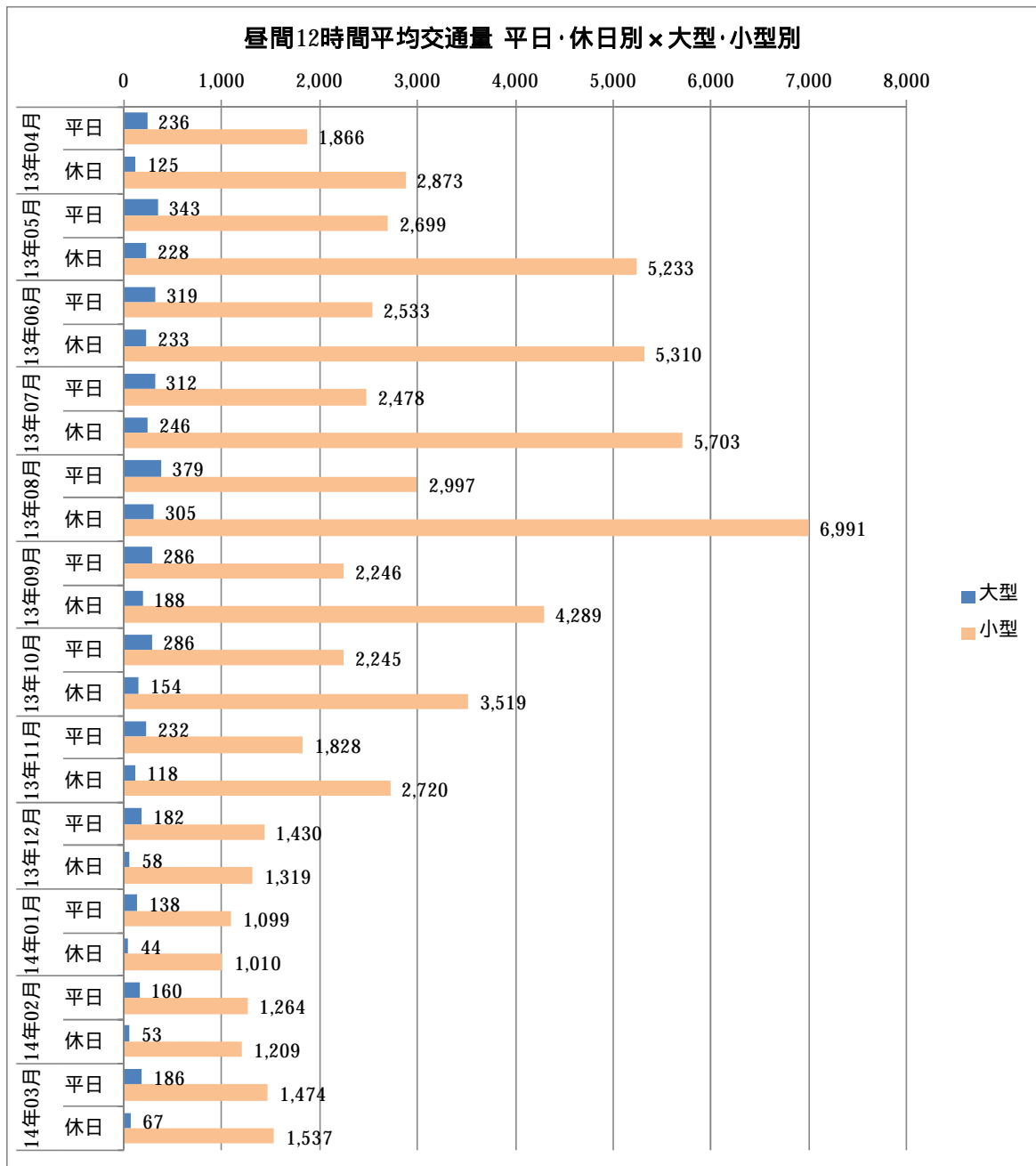


図 9 厚田市街地周辺エリアの国道 231 号の昼間 12 時間平均交通量

(出典) 交通量調査 (札幌開発建設部提供)

公共交通

厚田区の公共交通として、北海道中央バスの「札厚線(札幌～厚田間)」「札浜線(札幌～浜益間)」と沿岸バスの「特急はぼろ号(札幌～羽幌)」が運行しています。

平成 27 (2015) 年 11 月現在で、札厚線は上りが平日 5 本、休日 4 本、下りが平日 4 本、休日 3 本となっています。札幌から浜益区までをつなぐ札浜線は、平日・休日ともに上り・下りが 1 本ずつとなっています。特急はぼろ号は、平日・休日ともに上り・下りが 1 本ずつとなっています。

このように、石狩市中心部以北の厚田区・浜益区では、公共交通の利便性が低い状況にある中、更に、平成 28 (2016) 年 3 月末で札浜線が廃止となってしまいます。そのため、浜益区内全域を網羅するとともに、幹線バス(中央バス・沿岸バス)との接続を目的とした、浜益予約運行型バスが平成 28 (2016) 年度から運行されます。

表 2 札幌から厚田区までの公共交通

| 路線名 | | 主な停留所 |
|------|--------|--------------------------------------|
| 中央バス | 札厚線 | 札幌ターミナル 東茨戸 2 条 1 石狩庁舎前 厚田支所 |
| | 札浜線 | 札幌ターミナル 東茨戸 2 条 1 石狩庁舎前 厚田支所 浜益 幌 |
| 沿岸バス | 特急はぼろ号 | 札幌ターミナル 厚田支所 浜益 幌 増毛 羽幌 |



図 10 厚田・浜益間公共交通路線図および浜益予約運行型路線系統図

(出典) 石狩市地域公共交通会議資料

(4) 産業

農林業

石狩市の農業は、厚田、浜益、石狩それぞれで地域性があります。

厚田や浜益では、水稻や小麦などの土地利用型農業が中心となっています。また、畜産業も行なわれており、厚田の望来豚や、浜益の浜益牛などのブランド肉が特産品となっています。厚田では、かぼちゃやメロンの生産量が他の地域に比べて多く、JA女性部による加工品の生産・販売などが行われています。浜益には、さくらんぼなどの観光果樹園も多く、体験バスツアーといったグリーンツーリズムにも力を入れています。

石狩の農業は、大消費地に隣接する優位性を活かした都市近郊型で、馬鈴薯、人参、大根など畑作のほか、さやえんどう、ミニトマト、ブロッコリーなど多品目を生産しているのが特徴となっています。

石狩市の農業従事者数は、平成17(2005)年から平成22(2010)年にかけて1,223人から1,008人へと215人(17.6%)減少し、販売農家戸数も493戸から408戸に減少しました。

石狩市の林業は、森林組合などの関係機関や森林所有者との連携により、市の総面積の約74%を占める広大な森林の計画的な整備が進められています。森林の大半は国有林となっており、森林の持つ多面的機能(災害防止、地球環境保全、生物多様性保全など)の発揮される森づくりを目指して、間伐を中心とする木材生産を行うなど、未整備森林の解消に向けた取組が行なわれています。

漁業

石狩市の漁業は、日本海を臨む沿岸漁業が中心となっています。サケ定置網漁業を中心に、ニシン刺網、ホタテ養殖などが行なわれています。

厚田、浜益では、ホタテ養殖漁業が行なわれ、ウニ、アワビ、ナマコ、タコなどの主な漁場にもなっています。厚田から南側の砂浜域ではシャコ漁業も行なわれています。

平成16(2004)年に石狩、厚田、浜益の3漁業協同組合が合併し、石狩湾漁業協同組合となりました。石狩市の漁業従事者数は、平成16(2004)年から平成21(2009)年にかけて159名から146名へと13名(8.9%)減少しました。また、北海道全体と比べると、漁業従事者数の年齢構成は、65歳以上の就業者が多く、30歳未満の就業者が少ない比率で、漁業後継者比率(後継者がいる割合)も16%と低くなっています。

商工業

石狩湾新港工業団地を中核として、建設業や金属製品・食料品などの製造業、運輸・倉庫業、卸売・小売業、サービス業などの企業が立地しています。従業者数、事業所数は、商工業ともに減少傾向となっています。商業従事者数（小売業・卸売業）は、平成 16（2004）年から平成 24（2012）年にかけて 4,404 人から 3,940 人へと 464 人（10.5%）減少し、事業所数も 389 から 362 に減少しました。工業従事者数は、平成 16（2004）年から平成 25（2013）年にかけて 4,274 人から 3,834 人へと 440 人（10.3%）減少し、事業所数も 142 から 123 に減少しました。

石狩市の商業は、大型店の進出、人口減少による経済の縮小、高齢化による廃業・閉店などにより、商店の集積は減少の傾向にあります。地域の食資源を活かしたブランド化やご当地グルメなどの開発が行なわれ、産業間の連携が図られています。

石狩市の工業は、食料品製造業や金属製品製造業が中心となっています。製造業と並ぶ二次産業の主力である建設業は、新港地域や住宅団地の開発を中心に発展してきましたが、公共投資の縮減の影響を受けています。

観光

石狩市の観光入込客数は 182 万人（平成 26（2014）年度）となっています。

その特徴として、ほとんどが日帰り客であることがあげられ、札幌市に隣接していることが要因と考えられます。また、観光入込客の約 3 割が 30 歳代の家族連れ、次いで 20 歳代と 40 歳代がそれぞれ約 2 割を占めており、キャンプ目的を除けば、ほとんどが札幌からマイカーを利用した海水浴や海産物購入などを主目的とする日帰り客となっています（平成 18（2006）年石狩市観光調査）。

観光事業者や札幌市民には、海水浴場・ドライブルートとしての認知度はあるものの、観光地としての認識は薄いのが現状です。一方、観光地に期待する要素として「自然の風景」「温泉」「飲食施設」「イベント・祭り」などが注目されています。

2.2 地域資源

厚田に存在する資源について、観光資源、食資源、人的資源にそれぞれ整理します。







(1) 観光資源

厚田には、観光資源となる自然資源・施設・イベントなどが豊富で、桜の名所で有名な「戸田記念墓地公園」には、GW だけで約 15 万人の観光客が訪れるほか、「海浜プール」や夕日の名所(「観光案内所」・「恋人の聖地」)、「朝市」などについても、札幌などからの多くの観光客で賑わっています。

また、観光ニーズの一つである「体験観光スポット」は、キャンプ場やゴルフ場、乗馬やメロン収穫体験などに加え、近年では、サイクリングやトレイルランニングなども盛んになっており、石狩地区の工場見学をはじめとする産業体験や、浜益地区の釣りや果樹園、シーカヤックなども含めて多様なメニューが存在します。

代表的なイベントである「厚田ふるさとあきあじ祭り」は、「石狩さけまつり」「浜益ふるさと祭り」とともに、石狩三大秋祭りとされ、海産物をはじめとする地域産品の直売などが行われており、このほかにも、厚田神社例大祭、ウィンターレクフェスタ、ツアーオブカムイなど多彩なイベントが行われています。

表 3 厚田の主な観光資源

| 分類 | 地域資源の例 |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 施設・イベント | <ul style="list-style-type: none"> ・ 厚田公園（恋人の聖地/展望台、キャンプ場） ・ 戸田記念墓地公園 ・ 厚田資料室 ・ 歴史的施設（戸田生家、戸田旅館、古潭港弁財船投錨地、歴史的人物関連の碑など） ・ 観光案内施設（情報発信基地「あった！」、あいロード夕日の丘観光案内所） ・ 海水浴場（厚田海浜プール、厚田ビーチセンターなど） ・ 厚田港朝市 ・ 野菜直売所 ・ スポーツ施設（ゴルフ・パークゴルフ場、乗馬、サーキット場など） ・ 宿泊施設（民宿） ・ イベント（ふるさとあきあじ祭、厚田神社例大祭、厚田区ウィンターレクフェスタなど） |
| 自然・景観 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 夕日 ・ 海岸線（暑寒別天売焼尻国定公園、オロロンライン） ・ 丘陵・山地（望来の坂、増毛山道、濃昼山道） ・ 森林資源 ・ 田園風景 ・ 雪 |
| <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>厚田公園キャンプ場</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>戸田記念墓地公園</p>  </div> </div> | |
| <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>あいロード夕日の丘観光案内所</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>厚田海浜プール</p>  </div> </div> | |
| <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>厚田港朝市</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>濃昼山道</p>  </div> </div> | |

(2) 食資源

海産物・農産物

厚田には、多様な海産物・農産物があります。6～11月にかけては野菜・果物、4～6月にかけては魚介が主要産物となります。

海産物は、鮭やニシン、かれい類などの魚類、ホタテ貝、ホッキ貝、タコ、ナマコのほか、シャコやウニなども獲れるなど、少量多品目である点が特徴です。厚田の朝市は、4-10月に開設されており、年間3万人が訪れる人気のスポットとなっていますが、時期によって品揃えに大きな差があることや、調理施設がないことなどが課題となっています。石狩市全体の特徴としては、朝市が厚田・浜益・石狩の漁港で行われていること、特に浜益には海産物直売所が多く立地していることがあげられます。

農産物は、厚田では米や麦を中心に、メロン・かぼちゃの栽培や、望来豚といったブランド肉の生産も行なわれています。石狩市全体の特徴として、葉物・根菜など野菜の生産は石狩、いちごやさくらんぼなどの果物の生産は浜益に多くなっています。石狩市では、野菜、果物、穀物とバランス良く多様な農産物が生産されています。野菜の直売所は、厚田の望来・聚富地区に多く、ほとんどの施設が4-10月下旬までの営業となっています。

加工品

加工品は、厚田では農産物の商品化が比較的進んでおり、地域の産物を活用して、菓子・飲料・大豆製品といった加工品が作られています。一方、主要産物である海産物については、商品数が少ない状況です。石狩では、海産物、農産物それぞれ関連の商品が見られますが、鮭、コンブ、かぼちゃなどの素材に限定されています。浜益では、菓子やジャムなどの加工品に限定されています。また、新石狩ブランド推奨品としての認定が商工会議所によって行われています。

飲食店・ご当地メニュー

飲食店は、和食が比較的多く、市街地部分に集中しています。厚田には、景観を活かしたカフェやレストランが多くあるのが特徴的です。また、厚田十字街には、ミシュランのビブグルマン店として年間約1万人が訪れる「かねとも寿司」や札幌圏でも人気の「妹尾豆腐店」、浜益には浜益名物手焼きどら焼きで人気の「ふじみや製菓」などがあります。

地元食材を活かしたご当地メニューに関する取組も行われています。全国でも知名度の高い「石狩鍋」の復活プロジェクトは、観光協会、漁協、商工会議所、商工会、料飲店組合などの協力のもと、観光振興計画の

重点プロジェクトとして取り組まれています。「いしかりバーガー」「いしかり丼」「石狩鮭醤油らーめん」は新たに開発されたご当地グルメです。いしかりバーガー事務局や石狩麺恋会といった事務局が設置され、加盟店ごとに工夫を凝らした内容となっています。

(3) 人的資源

地域には、互いに助け合う共助の精神から培われたボランティア意識が根づいており、合併を契機とした住民と市の「協働」による地域の活動が活発となり、厚田をもっと知ってもらいたい、広めたい、盛り上げたいという住民の想いが、地域資源を活用したさまざまな動きに変わり、住民主体の事業展開につながっています。

しかし、高齢化による地域づくりの後継者の確保が課題となっている今、現在進めている3つの大学との連携・交流による取組など、地元人材の掘起しと同様に、大学との関わりも大切にしていかなければなりません。

都会にはない人のつながり、味わうことのできない地域とのふれあい・交流から地域の魅力をさらに伝え・実感してもらい、若い学生との連携や融合という視点を大切に、幅広い人的資源の活用を目指しています。

第3章 地域課題の整理

人口減少と高齢化の問題は、平成 26（2014）年に「日本創生会議」が公表した「消滅可能性自治体」リストが引き金となり、もはや内政の主要課題として認識され、安倍内閣は政府に「まち・ひと・しごと創生本部」を設置し、平成 27（2015）年度を初年度とする今後 5 か年の政策目標や施策の基本的方向、具体的な施策をまとめた総合戦略を策定しました。

地方の人口減少の主な要因は、合計特殊出生率の減少に加え、公共投資の減少や製造部門の海外移転などの影響による大都市などへの若年層の流出が、その状況を加速させていると言われています。

日本経済新聞が発表した「人口減少地図」でもわかるとおり、「石狩市」は平成 22（2010）年から平成 26（2014）年までの人口減少率が - 1.8%、平成 52（2040）年までの若年女性（20～39 歳）の減少率は - 47.0%と極めて高い数値となっており、特に、その状況が深刻な厚田・浜益地区では、これに起因するさまざまな課題が浮き彫りになっています。

（1） 地域産業の衰退

生産年齢人口が減少し、特に農業・漁業などの 1 次産業では後継者・新規就業者の確保・育成が課題となっています。

農林漁業では、兼業化、生産基盤の脆弱化、漁獲量の減少、輸入品との競争など、取り巻く環境が厳しさを増しており、地域産業の競争力の強化が課題となっています。

商業では、小規模な個人経営の小売業が主体で、食料品・日用品などを取り扱っていることから、収益性は低く、高齢化や札幌圏の大規模商業施設などへの買い物客の流出によって、厚田十字街では、商店街利用者が減少しています。地域の生活を支えるための商品・サービスの提供など、活性化・魅力づくりが課題となっています。

観光では、そのニーズが多様化し、インバウンド（訪日外国人旅行）への対応や団体ツアーから個人旅行へのシフト、滞在型・体験型観光へのニーズが高まっている中、既存の多様な地域資源（施設・イベント、自然・景観、食など）の魅力を十分伝えきれていません。地域の顔となる拠点を整備し、効果的な情報発信と対外ニーズに即した事業展開の工夫が求められます。

また、地域の 1 次・2 次・3 次産業間の連携による地域産品のブランド化や特産品・メニュー開発については、これまでも取り組まれています。取組の継続性が課題であり、対外的なブランドとしての確立・定着には至っていません。

(2) コミュニティ活動の担い手不足

現在、厚田には、漁・農・商・観の連携に取り組む『厚田こだわり隊』をはじめとして、地域の住民が主体となって取り組む活動団体が数多くあり、独自性豊かな活動を展開していますが、メンバーの高齢化が顕著であり、その自立・継続をどう図っていくかが課題となっています。

また、厚田には、地域に根付く文化・歴史がありますが、担い手の減少や高齢化などから、これらの継承が課題です。

さまざまな活動の情報を、域外にも広く発信し、地域の応援団を作り出すとともに、地域課題を自身のこととしてとらえ、コミュニティ活動に積極的に参画する担い手を増やしていくための世代を超えた交流の場などが求められます。

(3) 地域生活サービスの衰退

厚田や浜益は、石狩に比べて、一人暮らしや夫婦のみの世帯が多く、高齢者の割合も高くなっています。地域の高齢化が進む中で、将来も安心して生活できるまちづくりが求められます。

公共交通においては、便数が少なく、車による移動手段を持たない高齢者の生活の足は、ボランティアによる移送サービスや、スクールバスへの混乗などにより支えられている状況です。高齢者をはじめとする地域住民の暮らしを支える生活の足の確保が課題となっています。

保健・医療においては、現在は地域に医療機関がありますが、今後は、医療機関への交通手段の維持や、高度医療の治療への対応に向けた広域医療ネットワークの構築、在宅福祉サービスの充実が課題としてあげられます。

買い物においては、購買力の低下や事業者の高齢化などに起因して、商店街における空き店舗や空き地の増加が見られ、地域内での生活機能の低下が課題となっています。

教育・子育てにおいては、児童・生徒数の減少によって小中学校の統廃合が行なわれている中、遠距離通学への対策や、地域における教育・子育て環境の整備や充実した支援が課題となっています。

第4章 石狩市厚田多機能拠点形成ビジョン

4.1 基本的な考え方（コンセプト）

地域の特色あるまちづくり・地域づくり、地域活性化を推し進めるため、地域の現状と課題を踏まえ、その解決策や新たな事業展開に向けた取組が必要です。そのためには、以下の3本の柱を基本として、住民との「協働」によるまちづくりを目指します。

（1） 住民自治の推進

これまでに、住民自らが地域課題の解決に取り組み、地域活性化を目指してきました。そこには地域資源を活用した「協働」によるいくつかの取組が生まれ、さらに、その事業を「守り育てる」という意識が醸成され、事業が継続的に展開されています。

しかし、担い手の高齢化が進み、活動継続のための人材確保が課題となっており、今後は、さらに多くの幅広い方々が関わり、携わることが求められます。

さらなる住民自治の推進に向けた意識醸成が図られるよう、その気運づくりを図ります。

（2） 賑わいの形成

厚田・浜益両区には、都会では味わうことのできないさまざまな地域資源が数多くあり、これらを活用することにより、域外需要の獲得と交流人口の増加を目指します。

当地の魅力を感じ、また訪れたい気持が醸成されるよう、受け入れ側においても、おもてなしの心を磨き、域外の多くの人々が「魅力あるまち」と実感でき、賑わいが形成されるよう事業展開を図ります。

（3） 自慢できる（誇れる）まちづくり

地域住民が安心して生活できる基盤を確立し、自らがここに住んでいることを自慢でき、その良さを実感・誇れることが、域外から人を呼び込む原動力となります。そのためには、多くの住民が地域づくりに関わり、事業に参画することが求められます。そこから住民が「達成感」「充実感」を味わい、参画する「楽しさ」「喜び」を見つけ出し、「やりがい」「いきがい」へと結びつけることができるよう事業展開を図ります。

地域の人々が楽しく・喜び暮らしていると、域外からもおのずと人が集まり賑わいのある街の形成につながります。このことは地域が目指す将来の姿「近説遠来」の実現となります。



図 12 地域全体のネットワーク (事業フィールド)

(1) 集客交流拠点

「集客交流拠点」では、地域住民と来訪者による賑いを創出し、交流の場となる拠点の形成を目指します。

「道の駅」の整備により、地域の活性化の核として機能させることが求められます。広域的な集客を図るため、地域の食の魅力を楽しめる物販や飲食機能を整備するとともに、食だけではない地域の魅力、歴史、文化を伝え、来訪者がまちを回遊したくなるような情報発信機能の強化に向けた取組が必要です。

道の駅の整備
地場産品の販売・飲食サービスの提供
情報発信機能の強化
地域の歴史・文化・自然資源に係る情報発信
地域との交流機能の強化
地域交通拠点の整備

道の駅の整備

道路利用者の安全で便利な環境整備に向けて、情報発信（交通情報、地域情報、気象情報）の提供や、無料休憩コーナー、24時間トイレ、地場産品の販売機能などを有する道の駅を整備します。

利用者が、興味に応じてさまざまな情報を入手できるように、掲示板や案内窓口、WiFiスポットの整備などを検討します。

これらの整備が実現すれば、冬期の猛吹雪時には24時間利用できる車両待避所として、天候の回復を待ちながら、目的地までの交通・気象の情報を収集するなど、道路利用者の安心・安全のための機能も確保できます。

地場産品の販売・飲食サービスの提供

札幌圏や広域から人を呼び込む魅力づくりとして、鮮魚などの海産物や農畜産物の直売、加工品などの販売、飲食サービスの提供など、地場産品の購買機能の充実が求められます。

取り扱う産品は、厚田のものだけでなく、浜益や石狩なども含めたものとして、石狩市全体の地場産品のアピールを行うことで、地域全体の活性化につなげていく必要があります。

また、農海産物の直売は、夏冬の入り込み差が大きく、冬の来訪者が大きく減少する厚田の地区特性を考慮すると、通年営業が難しいことも想定されます。このため、通年での維持コスト低減のため、道の駅本体とは別棟化するとともに、供給能力に合わせた適切な施設規模を設定し、将来、売り上げ状況により拡張できるような施設として検討します。

なお、道の駅で直売所を展開する際には、厚田漁港で開かれている朝市との連携を考慮することが必要です。

さらに、生産者の顔が見える体制を整え、1次製品の品質を維持することによって、リピーターの確保を図ることも必要です。

情報発信機能の強化

地域外からの来訪者を集客し、そこから地域内、さらに浜益や石狩へ誘導するため、地域の顔として、「食」「自然」「歴史・文化」など、厚田や周辺地域の魅力を伝える観光情報の発信や案内機能の充実が求められます。

道の駅では、厚田の地域情報に興味を持ってもらい、魅力を感じるように伝えることが重要です。地元の生の情報は、地域の人が一番詳しいことは言うまでもありません。訪れる人が、地域の魅力を感じ、リピーターとして、また来てもらうためにも、地域住民が、さまざまな形でこの施設に集い、それぞれの言葉で地域の魅力を伝えられるような情報発信のスタイルを目指します。

同時に、広域的な情報発信も進める必要があります。浜益は、厚田と並ぶ一次産品の宝庫であり、アウトドアや温泉などを楽しめる環境も豊富です。道の駅がターミナル機能を発揮し、過疎が進行している厚田・浜益両地区の活性化につなげていくことが必要です。

具体的な情報発信の手法としては、案内窓口やホームページ、ガイド等による観光ルート、飲食店、宿泊施設、特産品、イベント情報などの発信に加え、サクランボ狩りやメロン収穫、サイクリングやシーカヤックなどの体験型観光プログラムの案内・予約サービス、それらを活用したツアー企画のほか、アウトドア用品などの貸出サービスについても検討します。

また、インバウンドへの対応として、札幌圏のホテルや事業者と連携して情報の発信強化に努めるとともに、段階的にこれらに対応した情報媒体の作成・ガイドなどの体制整備についても検討していきます。

地域の歴史・文化・自然資源に係る情報発信

厚田には、「厚田資料室サポートの会」の活動に代表されるように、地域住民が自ら地域の歴史・文化・伝統を内外に発信しようとする取組が根付いています。

道の駅では、こうした動きを継承し、来訪者の方々に、より親しみやすくわかりやすい形で郷土の情報を発信する環境整備が求められます。

郷土情報発信スペースは、ふらりと立ち寄った人にも気軽に見てもらえるような空間とします。例えば、展示のテーマを「厚田の風景」「厚田の物語」「厚田の現在」と設定するなど、地域の歴史を伝え、未来に繋げる展示空間となるような演出や、日々その地域で暮らす住民がガイド役を務めるなど、その運営についても工夫していきます。

地域との交流機能の強化

前項の「厚田資料室サポートの会」による企画展示や「こだわり隊」のイベントなど、道の駅がさまざまな地域活動の発信の場となることで、モチベーションの向上と地域への誇りの醸成につながります。

また、地域の子供たちが、安心して楽しめる遊び場を提供することも重要です。それらの取組により、地域の人々が道の駅に集まり、来訪者との交流が生まれます。

地域の活動は多様であり、来訪者が、それらに触れ体験できることが、地域を知ってもらい、魅力を体感してもらうことにつながります。

施設の規模は限られるにしても、そうした多目的な活用が図られるような運営と環境整備を検討します。

地域交通拠点の整備

地域の交通拠点としての道の駅の活用を検討します。浜益・厚田間のデマンドバスや区内を運行する公共交通の停留所・待合所として活用することで、利用者の利便性の向上と、地域内外の人々の交流の創出にもつなげていきます。

(2) 地域生活拠点

「地域生活拠点」では、幅広い人材や地場産品の活用によって、地域内外の交流を活性化させる拠点の形成を、地域住民とともに目指していきます。

地域住民が誇りを持って暮らすことができ、来訪者にとっても魅力的な地域となるよう、地域の声と外からの新たな視点・感性を取り入れて、地域活性化に取り組むことが必要です。

| |
|---------------------------------------------------------|
| 地域力創造に向けた人材活用 厚田への移住促進 地域の賑わいづくり 地場産品活用による魅力発信 |
|---------------------------------------------------------|

地域力創造に向けた人材活用

地域力の創造に向け、地域おこし協力隊や集落支援員制度、さらには産学官の連携など、さまざまな視点からフレッシュな人材との融合による新たな取組・展開を目指します。

地域では、これまで地域おこし協力隊として2名の域外の人材を導入しています。地域とのふれあいから厚田の魅力を肌で感じ、地域を知り、厚田を好きになり、このことが地域おこし活動の基礎となって、地域に根ざした取組や地域活性化に向けた企画・実践の動きへと導いています。

今後も地域の声を聞きながら、これまでの動きを検証し、地域おこし協力隊制度等の活用や大学との連携など、幅広い人材の活用に向けた検討を進めます。

厚田への移住促進

厚田の魅力を感じ、厚田を好きになり、厚田で暮らしたいと希望する方々の移住・定住の促進は、新たな視点・感性を地域と融合・調和させることにより、地域活性化を加速する可能性を大いに秘めています。

今後は、市街地等での物件の把握とともに、情報提供を行なう窓口を道の駅に設けるなど、その促進に向けた事業スキームを検討します。

地域の賑わいづくり

地域住民が「楽しみ」「喜び」を抱き「やりがい」「いきがい」「誇り」を持ちながら日々暮らせる環境を創出することは、域外からの来訪者にもその様子が伝わり、おのずと人が集まり賑わいのある街をつくり出すことにつながると考えられます。

厚田十字街をはじめとする市街地の賑わい形成については、魅力ある個店の活用とともに、地域主体のイベントの開催なども検討し、同時におもてなしの心の醸成にも取り組む必要があります。

道の駅を核とした賑わいを、厚田十字街をはじめとするさまざまな地域に波及させる仕掛けづくりを地域とともに検討していきます。

地場産品活用による魅力発信

地域には、四季を通して魅力的な旬の素材が数多くあり、この素材を活かした食の提供から、地場産品の魅力を発信し、食のまちづくりを推進します。

早朝から「朝市」を訪れる方をターゲットとして、旬な魚介類を地元ならではの食べ方でもてなすなど、地域のアイデアを食の魅力発信に結び付ける取組の展開を目指します。

また、街並みや建造物など、新たな地域資源の掘り起こしや利活用による魅力発信のあり方についても地域とともに検討します。

(3) 自然体験交流拠点

「自然体験交流拠点」では、滞在型の自然体験ができる拠点の形成を目指します。

厚田公園のキャンプ場の拡充や遊歩道(散策路)の再整備、スキー場の遊休施設の活用など、豊かな自然環境を楽しみ、体験できる拠点としての整備を検討します。

また、周辺林道や山道を活用したサイクリングやトレッキングなどを推進するため、レベル別のコース設定やイベントの開催・ツアーの支援など、ソフト面での事業展開も検討します。

| |
|--------------------------|
| 滞在機能の拡充 アウトドア・スポーツの推進 |
|--------------------------|

滞在機能の拡充

厚田公園のキャンプ場は、札幌近郊の隠れた穴場として、年間約3,000人の方々に利用されています。お気に入りのキャンプ道具を持って、落ち着いた雰囲気の中で自然を満喫できることが人気の秘密です。

一方、近年は、道具や食材などを用意することなく、気軽にアウトドアを楽しめる「手ぶらキャンプ」などの人気も高まっています。

これらを踏まえ、拠点の整備に際しては、旧スキー場レストハウス周辺の再活用を検討します。レストハウスにシャワーやトイレ、簡易宿泊機能を用意するとともに、周辺は、気軽にキャンプが楽しめるようなサービスの提供を検討します。

また、既存の遊歩道(散策路)も、そのコースを旧スキー場側まで延長することにより、道の駅との動線が確保され、周辺一帯の散策機会を拡大することにつながります。

アウトドアは、自然との調和が何よりも大切です。既存の自然を最大限生かし、あまり人工的とならないような意識を持って段階的な整備を検討します。



図 13 厚田公園内の遊歩道の様子

アウトドア・スポーツの推進

北海道では、広大な景観と広い道幅、交通量や信号が少ないなどの道路環境によって、サイクリングの適地として国内外からの旅行者が増えており、広域観光の一つとしての集客性が注目されています。

既に、厚田公園周辺は、新篠津や当別などを含む広域的なエリアでサイクリングを楽しむ人々が多数訪れています。

こうしたニーズをさらに取り込んでいくため、道の駅には、駐輪スペースや修理工具などを貸し出すサービスステーション機能を整備するとともに、愛好者の方々に、トイレや飲食店、宿泊施設などの情報を掲載したコースマップの作成なども行っていく必要があります。

将来的には、こうした愛好者の宿泊ニーズに対応するため、サイクリングの聖地と言われる「しまなみ街道」に見られるような民泊系のライダーハウスの整備や、サイクルバス等のサービスも検討していくことが求められます。

このほか、地域で行われている乗馬や田植え、稲刈り、魚はずしといった体験観光との連携・事業化について地域とともに検討します。

また、新たな展開として、海から厚田を観る漁船「遊覧体験」や民泊による田舎体験、スノーモービル体験など滞在型の体験観光の掘起しを検討します。

(4) 相互ネットワーク（周遊動線の強化）

道の駅をはじめとする各拠点が、それぞれの機能を発揮して、地域活性化を果たしていくためには、拠点間の回遊性の向上も重要な要素です。

林道八幡沢線とその周辺の遊歩道を活用し、サイクリングやトレッキングを楽しめる環境を充実させるとともに、周辺エリア内に統一した案内板・案内サインを設置することで、市街地との動線を強化し、朝市や十字街などへの観光客の誘導を図ります。

また、新たな地域資源の掘り起こしとともに、街歩きガイドやスタンプラリーなど、体験型の周遊プログラムの充実を図り、周辺エリアはもとより、市域全体の連携を強化します。

| |
|------------------------------------------------|
| 案内板・案内サインの整備 林道八幡沢線および遊歩道の再整備 周遊プログラムの充実 |
|------------------------------------------------|

案内板・案内サインの整備

周遊動線の強化を図るため、周辺地域の魅力やモデル周遊コースなどの情報発信を行うとともに、わかりやすい案内板や案内サインの設置を検討します。

朝市や厚田十字街、キャンプ場などの地域の主な観光拠点や、石狩・浜益への回遊性を高めるための広域情報などのほか、来訪者の興味・関心を引く情報（食、遊ぶ、知る、泊るなど）を勘案するとともに、所要時間の目安などを分かりやすく表示することが求められます。

また、インバウンド観光への対応に向けて表示を多言語化・ピクトグラム化するなどの手法も検討します。

林道八幡沢線および遊歩道の整備

道の駅と自然体験交流拠点を結ぶ動線軸を強化するため、国道231号から厚田公園キャンプ場に続く林道八幡沢線のうち、市街地側から旧スキー場レストハウス周辺までの区間の整備を検討します。

また、周辺の自然散策コースの充実のため、現在ある遊歩道(散策路)のレストハウス周辺までの延長と、厚田公園キャンプ場までの林道の車両の通行規制などについても検討します。

周遊プログラムの充実

道の駅から、周辺エリアへの誘導は、事業規模が大きいハード事業だけでなく、周遊プログラムやイベントなどのソフト事業も多様に展開する必要があります。

道の駅では、インフォメーションや資料展示コーナーなどでの情報発信とともに、スポーツや自然・街歩きなど、興味・関心を集めるガイド事業を展開し、各拠点への誘導を図っていきます。

また、子供連れやカップル向けには、一般的なスタンプラリーだけでなく、謎解きや宝探しなどゲーム性の高いラリー商品を開発することも、回遊性を高めるうえで効果的です。

道の駅周辺だけでなく、浜益や石狩なども含めた広域的な要素を加味するとともに、期間限定のイベント的にさまざまなパターンで実施するなどして、飽きの来ないプログラムとする工夫が求められます。

第5章 推進方針

5.1 ビジョンの推進方針

人口減少・少子高齢化といった「人口問題」は、政府が長期ビジョンをまとめて、初めて具体的な人口維持の目標を示すなど、国全体の主要課題となっており、少子化対策や社会保障政策の見直しとともに、地方創生に向けた動きが活発になっています。

このことは、人口問題に起因する厚田・浜益のさまざまな地域課題が、それだけ根の深い問題であることを示しており、その解決には、地域が主体的に取り組むとともに、本ビジョンで示した各拠点の機能を総合的に発揮して押し進める必要があります。

また、人づくりや事業環境の整備については、大きな財源が伴うとともに、地道で息の長い活動の積み重ねが必要不可欠です。

このことから、本ビジョンは、その取組の進捗状況に合わせて検証を重ね、長期的な視点に立って進めていくものとします。

集客交流拠点となる「道の駅」は、過疎化の著しい地域に、人やモノを呼び込み、新たな事業展開や雇用の創出など地域活性化を目指す上で核となる施設です。重点道の駅選定による支援等も活用して先行して整備を進めます。また、そこに求められるサービスには、さまざまな形で地域がその運営に関わることが欠かせません。

自然体験交流拠点は、道の駅と同様に、域外からの来訪者に、豊かな自然環境を体感してもらい、厚田ファンを増やしていくためのものです。既存の施設の有効活用とともに、各種サービスの開発状況を踏まえて、段階的にその充実を目指します。

地域生活拠点での取組は、地域住民を主体とした実施を想定するものが多く、活動主体の育成・検討には相応の時間も必要です。道の駅等の集客効果も見定めながら、地域に根付いた取組となるよう準備を進めます。

また、厚田多機能拠点の形成は、厚田地域の振興に加え、石狩・浜益を含む地域全体の活性化を目指すものです。各地域の観光資源との連携を強化して、ターミナル機能の充実と周遊観光の促進を図ります。